

つまり到着に着目する)」

②「ガ格にたつものがニ格の地点に接触すること」

●とどく/N<sub>1</sub>ガ(N<sub>2</sub>カラ)(N<sub>3</sub>ニ/マデ)\_\_\_\_\_

「ガ格にたつものがカラ格の地点からニ格あるいはマデ格の地点に外力によって移動すること」

/N<sub>1</sub>ガ(N<sub>2</sub>ニ/マデ)\_\_\_\_\_

「ガ格にたつものが地面などの基準点と

ニ格の地点を結びつけること」

以上のように用法ごとにその意味を記述してみたが、一つの用法の中にいくつかの記述があること、用法の意味の記述であって、動詞の意味の記述になっていないことは問題として残るだろう。また分析方法の検証も必要だろう。

言語経歴：1958年11月 東京都豊島区生  
3歳～ 埼玉県朝霞市

## たどる・つたう・つたわる・なぞる

西牧 みやま

### 1. はじめに

「たどる」「つたう」「つたわる」「なぞる」は、あるものが、径路に沿って(あるいは径路上を)移動することを表わす、という点で意味の共通性がある。しかし、移動するものや径路の質、移動の仕方などには相違がある。そこで、ここではこの四語の用いられる文型を分類し、例文をつくり、その例文を通して四語の差異を比較・分析してゆきたい。

### 2. 分析

2. 1. 文型A「(N<sub>1</sub>ガ・ハ) N<sub>2</sub>ヲ ~」について  
……(N<sub>1</sub>=移動の主体の場合)

2. 1. 1. 「N<sub>1</sub>(=移動の主体)」

- (1) 彼は 家路を たどる。
- (2) 泥棒は 屋根を つたう 逃げた。
- (3) 音は 空中を つたわる。
- (4) 私は 手本を なぞる。

(1)~(4)の例文のように、文型Aについては四語とも使える。しかし、(1)~(3)までの例文では「N<sub>1</sub>ガ・ハ(N=名詞)」にあたるものが移動の主体になっているが、(4)では「N<sub>1</sub>」にあたる「私」が移動の主体になっているわけではない。(4)は、ことばを補って次のように言いかえることもできる。

(4) 私は 筆で 手本を なぞる。

(4)では、移動の主体は「筆」である。「なぞる」について、「N<sub>1</sub>」にあたるものが移動の主体になる場合があるか、いくつかの例文をあげて考えてみよう。

- (5) \*彼は 家路を なぞる。
- (6) \*泥棒は 屋根を なぞって 逃げた。
- (7) \*音は 空中を なぞる。

- (8) 私は 谷川を たどって 山小屋に着いた。
- (9) \*私は 谷川を なぞって 山小屋に着いた。
- (10) 私は 険しい山道を たどって 頂上に着いた。
- (11) \*私は 険しい山道を なぞって 頂上に着いた。
- (12) 涙が 頬を つたう。
- (13) \*涙が 頬を なぞる。
- (14) 熱が 鉄板を つたわる。
- (15) \*熱が 鉄板を なぞる。

以上は、文型Aで、「たどる」「つたう」「つたわる」が言えて、「なぞる」が言えない例である。これに対し、文型Aで「なぞる」が使えるのは、次のような例文である。

- (16) 彼は うまく書けないので 手本を なぞった。
- (17) 私は 不鮮明な文字を なぞって はっきり読めるようにした。
- (18) 私は トレーシングペーパーを重ねて 地図を なぞった。

(16)~(18)では、「N<sub>1</sub>」が移動の主体になっていない。「N<sub>1</sub>」以外が移動の主体になる場合については別の文型で検討することとし、ここでは分析の対象を「たどる」「つたう」「つたわる」の三語にしぼる。

○「N<sub>1</sub>(=移動の主体)」が生物の場合

- (1) 彼は 家路を たどる。
- (19) 蟻が 砂糖の跡を たどる。
- (20) 私は 谷川を つたう 山小屋に着いた。
- (21) 彼女は ロープを つたう 二階から庭へ降りた。
- (22) 私は 長い廊下を たどって/つたう 広間に出た。

以上のように、「N<sub>1</sub>」が「生物」の場合「たどる」

「つたう」は言える。これを「つたわる」に置きかえてみよう。

- (23) \*彼は 家路を つたわる。  
(24) \*蟻が 砂糖の跡を つたわる。  
(25) ??私は 谷川を つたわって 山小屋に着いた。  
(26) ??彼女は ロープを つたわって 二階から庭へ降りた。  
(27) 私は 長い廊下を つたわって 広間に出た。  
「つたわる」は私自身の内省では、主体が〈生物〉の場合には使えない。

○「N<sub>1</sub>」が具体的(目に見えるもの)物体で無生物の場合

- (28) \*涙が 頬を たどる。  
(12) 涙が 頬を つたう。  
(29) ?涙が 頬を つたわる。  
(30) \*雨水が 壁を たどる。  
(31) 雨水が 壁を つたう。  
(32) ?雨水が 壁を つたわる。  
(33) \*血が 額を たどって 落ちる。  
(34) 血が 額を つたって 落ちる。  
(35) ?血が 額を つたわって 落ちる。

「N<sub>1</sub>」が〈具体的(目に見えるもの)で、無生物〉の時、「つたう」は言えて、「つたわる」はかなり不自然な感じがする。<sup>(註2)</sup>「たどる」では言えない。次の例文は表面上「たどる」の「N<sub>1</sub>」が無生物の例である。

- (36) 船は 水路を たどって 上流へのぼる。  
(37) 車は 細い道を たどって 進む。

しかし、これらは、「人が船で/車で(乗物で)」という意味であって、移動の主体が人であることと変わりがない。

○「N<sub>1</sub>」が目に見えないものの場合

- (38) \*音は 空中を たどる。  
(39) \*音は 空中を つたう。  
(3) 音は 空中を つたわる。  
(40) \*熱は 鉄板を たどる。  
(41) \*熱は 鉄板を つたう。  
(14) 熱は 鉄板を つたわる。  
(42) \*振動は 糸を たどる。  
(43) \*振動は 糸を つたう。  
(44) 振動は 糸を つたわる。  
(45) \*電流は 電線を たどる。  
(46) \*電流は 電線を つたう。  
(47) 電流は 電線を つたわる。

「N<sub>1</sub>」が具体的な物体でなく、〈ある状態を指す〉時には「つたう」は言えない。「たどる」は次のような

比喩的表現の時には「N<sub>1</sub>」が、〈目に見えない抽象的なものや状態〉を表わす場合にも使える。

- (48) 物価は 上昇の一途を たどる。  
(49) 病状は 悪化の一途を たどった。  
(50) 日本は 敗戦への道を たどった。

## 2. 1. 2. 「N<sub>2</sub>(=径路)」

これまで見てきた例文から、「たどる」「つたう」「つたわる」の径路の性質について考えてみよう。

○「たどる」の径路

(1)の「家路」、(8)の「谷川」、(10)の「険しい山道」、(19)の「砂糖の跡」、(22)の「長い廊下」、(36)の「水路」、(37)の「細い道」、(48)の「上昇の一途」、(49)の「悪化の一途」、(50)の「敗戦への道」。以上が「たどる」が言える。例文の「N<sub>2</sub>(=径路)」にあたるものである。これらの共通性を考えると、比喩的な意味も含めて、「たどる」の「N<sub>2</sub>(=径路)」は〈線のなもの〉と言える。(19)の「砂糖の跡」も砂糖がこぼれた跡が、線的に連続している意味である。

- (51) \*私は 校庭を たどって 裏門へ出た。  
(52) \*船は 湖面を たどって 進む。  
(53) \*私は 水中を たどって 対岸に出た。  
(54) \*飛行機は 日本上空を たどった。

(51)~(54)のように、「たどる」は〈面的〉な径路も〈立体的(空間的)〉径路も、とることはできない。

○「つたう」の径路

「つたう」は、(20)の「谷川」、(21)の「ロープ」、(22)の「長い廊下」などのように〈線的〉な径路について言える。また、(2)の「屋根」、(12)の「頬」、(31)の「壁」、(34)の「額」などのように〈面的〉な径路について言える。しかし、〈空間的〉径路については言えない。

- (55) \*しずくが 空中を つたって 落ちる。  
(56) \*石が 水中を つたって 落ちる。

○「つたわる」の径路

「つたわる」は、(44)の「糸」、(47)の「電線」、のような〈線的〉な径路、(14)の「鉄板」のような〈面的〉な径路、(3)の「空中」などの〈空間的〉径路、いずれに対しても使える。

## 2. 1. 3. 移動の仕方

「移動の主体」「径路」について見て来たが、ここでは、「移動の主体」が「径路」に対して、どう移動しているのか、移動の仕方に関して詳しく分析したい。

まず、「たどる」の言える例文((1)(8)(10)(19)(20)(22)(36)(37)(48)(49)(50))と「つたう」の言える例文((2)(12)(21)(22)(31)(34))

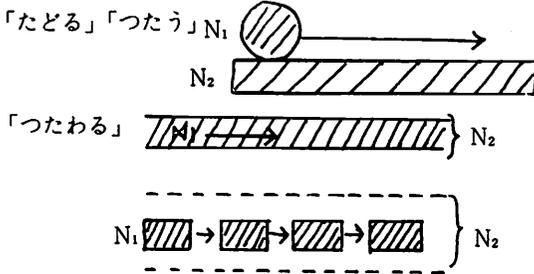
について考えてみる。これらの例文では、「N<sub>1</sub> (=移動の主体)」は「N<sub>2</sub> (=径路)」の外側 (径路上, あるいは、径路に沿って) を移動している。

- (1) 彼は 家路を たどる。  
 (8) 私は 谷川を たどって 山小屋に着いた。  
 (20) 私は 谷川を つたって 山小屋に着いた。  
 (21) 彼女は ロープを つたって 二階から庭へ降りた。

これに対し「つたわる」の言える例文 ((3)(14)(4)(17))を見ると、「N<sub>1</sub> (=移動の主体)」は「N<sub>2</sub> (=径路)」の内部を移動している。

- (3) 音は 空中を つたわる。

柴田編1979 (p. 137), 森田1977 (p. 300) を参考に、三語における「N<sub>1</sub>」「N<sub>2</sub>」の関係を図示すると次のようになる。



さらに「たどる」「つたう」の差異を見てみよう。

「たどる」が使えないで「つたう」が使える例文 ((2)(12)(21)(31)(34)) をみよ。 (2)を除いて、(12)(21)(31)(34)は〈液体が上から下へ、自然に移動する〉という意味を持っている。移動はなめらかで、径路には移動を促す動きがある。〈径路が移動を助ける〉という点では(2)についてもあてはまる。

これに対し「たどる」のみが使える例文をみよると、(10)は、移動の際、かなり努力が必要である。(19)では、径路をそれないために努力(さがしながら移動)する必要がある。

二語とも使える例は、それ程の努力(苦勞)も意識されず、単に(径路からそれない)という意味をもつ。

また「たどる」は比喩的な表現で使われることが多く、(1)はかなり比喩的な表現であると言える。

(注1)(注2)(注3)

私自身の内省では「つたう」「つたわる」を比較的是っきりと区別して使っているが、この二語が併用されている例もいくつか見られた。柴田編1979では「ツタウとツタワルの用法には、現在の東京方言では、ある個人差が認められる。」(p. 135)との指摘があり、その実例として文献の引用が数例、掲げられ

ている。そのうちのいくつかを参考にあげておく。

- (57) そして彼女の美しい瞳からは、こらえていた涙が頬を伝わりはじめた。(團伊玖磨『パイプのけむり』角川文庫p. 113)  
 (58) 洪作はその小道を伝わって、へい淵の岸へ出た。(井上靖『夏草冬澗』新潮文庫p. 331)

## 2. 2. 文型B 「N<sub>1</sub>ガ・ハ (N<sub>3</sub>カラ)(N<sub>4</sub>ニ・ヘ・マデ) ~」について

この文型でも、「N<sub>1</sub>」が移動の主体である場合を分析する。まず、文型Aの「N<sub>2</sub> (=径路)」を省略、あるいは「N<sub>2</sub>ヲ」のかわりに「N<sub>3</sub>カラ」「N<sub>4</sub>ニ・ヘ・マデ」を入れた文を考えてみる。

- (1) \*彼は (会社から) (家へ) たどった。  
 (10) \*私は (ふもとから) (頂上へ) たどった。  
 (12) \*涙が (目から) (顎へ) つたった。  
 (21) \*彼女は (二階から) (庭へ) つたった。  
 (22) \*私は (入口から) (広間へ) つたった/たどった。

以上のように「たどる」「つたう」は「N<sub>2</sub> (=径路)ヲ」が明示されない場合は使えない。これに対して「つたわる」をみてみよう。

- (3) 音が (あちらから) (こちらへ) つたわる。  
 (59) 噂が (A組から) (B組へ) つたわる。  
 (60) 誠意が (私から) (相手に) つたわった。  
 (61) 熱気が (ステージから) (客席に) つたわる。  
 (62) 振動が (床から) (体へ) つたわる。

「つたわる」は径路が明示されない場合も使える。これは「つたわる」の移動が、「隣り合う部分を次から次へ」「段階的に」(柴田編1979, p. 137) 移動する。また「一方から他方へと連鎖的に移行していく作用」(森田1977)の指摘と一致する。

- (59) 噂が A組から 全校へ つたわった。

また、(59)のような例文から、「つたう」「たどる」は一方方向の移動にしか使えないのに対し、「つたわる」は一点から波状に移って行く場合にも使えることがわかる。

## 2. 3. 文型C 「(N<sub>1</sub>ガ・ハ) N<sub>2</sub>ヲ N<sub>5</sub>デ ~」について (「N<sub>1</sub>」が移動の主体でない場合)

- (63) 線を 指で たどる。  
 (64) 線を 指で なぞる。  
 (65) \*線を 指で つたう。  
 (66) \*線を 指で つたわる。  
 (67) 地図を 棒で たどる。

- (68) 地図を 棒で なぞる。  
 (69) \*地図を 棒で つたう。  
 (70) \*地図を 棒で つたわる。  
 (71) 点字を 指で たどって 読む。  
 (72) 点字を 指で なぞって 読む。  
 (73) \*点字を 指で つたって 読む。  
 (74) \*点字を 指で つたわって 読む。

以上より、文型Cの中で使われる、つまり、N<sub>s</sub> (= 手段)をとるのは「たどる」「なぞる」の二語であることがわかる。

(63)~(74)の動作主はすべて人間である。また動作主が努力して「N<sub>s</sub> (=移動の主体)」を径路からそれないように移動させる、という意味の共通性がある。それでは、この二語の差異はどこにあるのだろうか。

- (75) \*手本を 筆で たどる。  
 (4) 手本を 筆で なぞる。  
 (76) \*不鮮明な文字を もう一度 ペンで たどる。  
 (77) 不鮮明な文字を もう一度 ペンで なぞる。  
 (78) \*トレーシングペーパーを重ねて 鉛筆で 地図を たどった。  
 (10) トレーシングペーパーを重ねて 鉛筆で 地図を なぞった。

以上の例文から、<「N<sub>s</sub>」が筆記の機能を持つ場合>「たどる」は使えない。「なぞる」は<筆記具を、線的な図形の上を移動させて同じ図形を再現して書き写す>という意味特徴を持つが、「たどる」には<書き

写す>という意味はない。したがって「N<sub>s</sub>」を移動させて図形が書かれるような場合には使えない。

### 3. 派生的用法

今までにもふれてきたが、比喩的用法を、ここであらためてまとめると、次のようになる。

「たどる」の比喩的用法

- (50) 日本は 敗戦への道を たどった。  
 (48) 物価は 上昇の一途を たどった。  
 (49) 病状は 悪化の一途を たどった。  
 (79) 私は 記憶を たどって 財布を落とした場所を思い出した。  
 (80) 彼は 血筋を たどると 源氏の末裔だということがわかった。  
 (81) 二人は 同じ運命を たどった。  
 (82) 話の筋道を たどる。  
 (83) 芭蕉の 足跡 (=旅程, あるいは 行蹟) を たどる。

「つたわる」の比喩的用法

- (84) 噂が 人々の間を つたわってきた。  
 (60) 誠意が 私から 相手に つたわった。  
 (61) 熱気が ステージから 客席に つたわる。  
 (85) 彼女の動揺が 私にまで つたわってくる。

言語経歴：1957年東京都新宿区生。2歳~調布市、現在に至る。

## かがむ・しゃがむ・うずくまる

山本清隆

### 1. はじめに

「かがむ」「しゃがむ」「うずくまる」は、いずれも<足で体重を支える><身体を低くする>という点で共通する動詞群である。

では、辞書の記述にあるような(特に「しゃがむ」の項のような)同義語かといえ、次のような使い分けがなされるように、用法の上で、動作の上から——本稿ではこれに着目するのだが——はっきりと相違点が認められる。

- (1) a 年老いた母の 腰が かがむ。  
 b \*年老いた母の 腰が しゃがむ。  
 c \*年老いた母の 腰が うずくまる。  
 (2) a ?爪先立ちで かがむ。

- b 爪先立ちで しゃがむ。  
 c \*爪先立ちで うずくまる。  
 (3) a \*路端に 犬が かがむ。  
 b ??路端に 犬が しゃがむ。  
 c 路端に 犬が うずくまる。

このような、三語間の用法差などを中心に、個々の意味を記述することが、本稿の目的である。

### 2. 分析の方法

この一連の動詞、「かがむ」「しゃがむ」「うずくまる」の分析にあたっては、特に次のような点に留意した。すなわち、この動詞群(以後、三語をまとめてこう言う)の分析に関しては、他の類義動詞群のように